

# 東北北部の新石器時代における海岸線の 浸退に関する試論

村 越 潔

- 1 序 言
- 2 貝塚の数と分布
- 3 海岸線の浸退について
- 4 海浸海退の原因
- 5 結 論

## 1. 序 言

縄文式時代の前半期に、海水がわが国土の低地、すなわち沖積平野の大部分をおおい、そのため狩猟・漁撈の生活を営んでいた当時の人々に、格好の食糧源を与えていたのであった。したがって、それらを得るために、彼等は台地の突端ないしは台地上の平坦部に占拠し、あらゆる手段をもって自然の恩恵を甘受したようである。そのあらわれた痕跡が、いまにのこる貝塚である。

貝塚は古代人の食物の残滓、ならびに使い古しや、破損した道具などがすてられて出来た、いわば一種の塵捨場と考えられている。したがって貝塚は、それらをのこした人々の生活を知る上に、重要な資料を提供してくれるのである。ところがこの貝塚は、ただ単に古代の食生活のみでなく、当時の自然環境についてもわれわれに思弁を与えてくれている。その一つが縄文式時代に起った、海岸線の前進と後退に関する事象なのである。

## 2. 貝塚の数と分布

日本全国で、いままでに知られている貝塚は2263ヶ所の多きにのぼり、その内訳は北海道127、東北280、関東1038、中部210、近畿48、中国305、四国46、九州209となっている。<sup>1)</sup>このように多数の貝塚を、表日本と裏日本にわけてその分布をみると、表日本（太平洋側）1997、裏日本（日本海・東支那海側）253となり、圧倒的な数の差をしめしている。のこる13ヶ所はオホーツク海に面するものである。このような数の差は、表日本にくらべて裏日本の海岸線の出入がすくないためでもある。たとえば佐賀・長崎のごとく、入江に富む両県は74ヶ所もあり、裏日本における貝塚全体の約35%をしめ、入江のすくない山形・鳥取・島根の3県では、その総数を加えても15ヶ所にすぎない。表日本において、

関東地方は前述のごとく全国の約半数をしめるが、貝塚形成期における海岸線の出入の複雑な点を考慮すれば、当然のことでもあり、また瀬戸内海沿岸の岡山・広島両県についても、同様のことがいえるのである。

数の上で表日本と裏日本の差のほかに、貝塚を構成する貝にも極端な異なりをみせている。たとえば、表日本では貝の種類が鹹水性のものを主とするものに対して、裏日本は淡水性のものが多いことである。この原因は、主として日本海側において、海岸線の出入が単調であったために干満の差がすくなく、それが貝の生育にも影響を及ぼしたり、また貝塚形成期における地形上の、あるいは沖積平野の生成といった、地理学的な要因の結果によるのかも知れない。しかしなお根本的な解決は、地理学と考古学による提携の必要があり、今後の問題として、両者により解決されねばならぬと思われる。

東北地方に所在する貝塚は、前述のごとく280ヶ所あり、その内訳は、青森30、岩手74、宮城129、福島39、秋田3、山形5となっている。しかしこれらの貝塚は、同一時代に営まれたものではなく、それぞれ時代を異にして形成され、同一時期の数はかなりすくなくなる。たとえばこれを時代別すると、縄文式時代188、弥生式時代5、土師器ならびに須恵器をとまうもの（奈良・平安時代と思われる）28、その他14（歴史時代のものをふくんで）、不明45である。しかし縄文式時代といっても、早期より晩期まで5期にわけられており、同一時期のものは思ったほど多くない。それを県別にわけて、表にすると次のようになる。

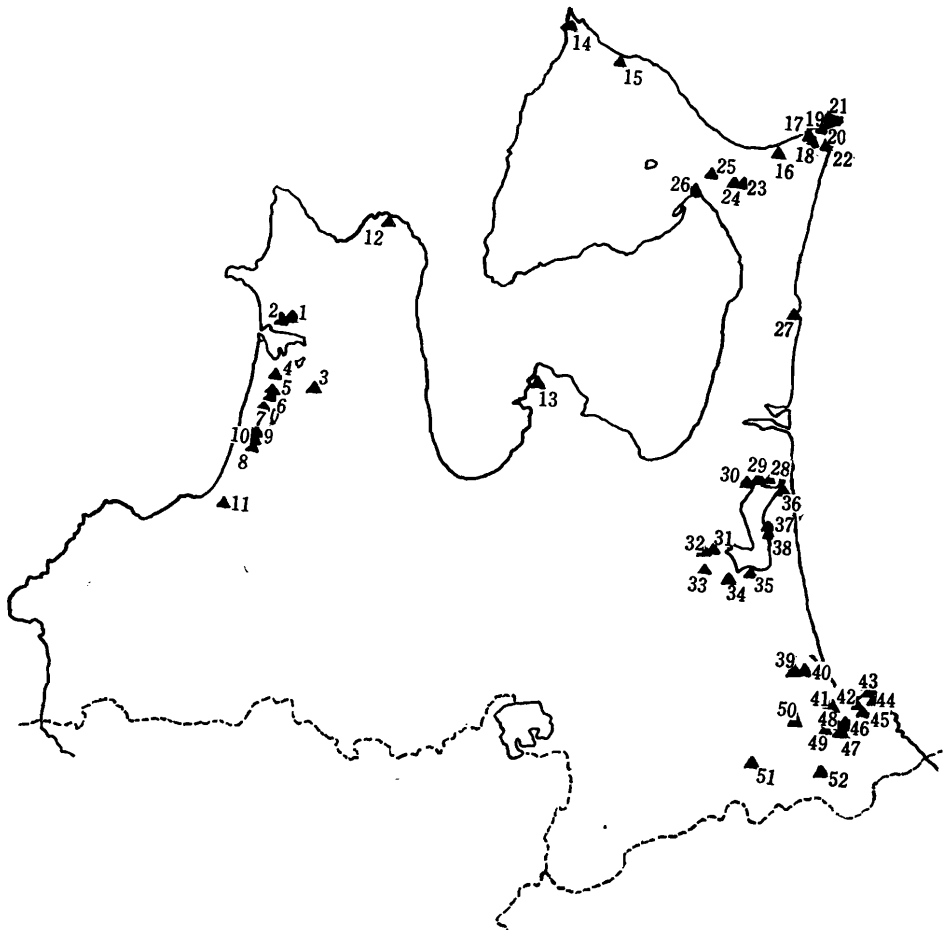
県別	時期別	縄 文 式 時 代					計
		早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	
青 森		2	8	4	0	5	19
岩 手		3	10	17	14	17	61
宮 城		8	16	11	23	18	76
福 島		0	4	14	5	3	26
秋 田		0	2	1	0	0	3
山 形		0	3	0	0	0	3
		13	43	47	42	43	188

この表でみると、早期における数はわずか13ヶ所であり、それも太平洋側にのみ存在し、前期以降もほぼ同様な様相を呈している。次の弥生式時代以降の数が減るのは、農耕を営むようになって、狩猟および漁撈は、彼等の生産手段における従の立場となり、貝塚の数も急激な減少をしめすのである。

東北部（青森県）の貝塚は、いままで30ヶ所が知られていたにすぎなかったが、その<sup>2)</sup>後青森県が主体となって行なった遺跡調査によって、19ヶ所が追加され、われわれの発見による3ヶ所をふくめると、総計52ヶ所にのぼる。これらの時代別は、縄文式時代早期5前期14、中期6、後期5、晩期8、擦文土器を出土するもの1、近世5、不明8となる（第1図参照）。しかしこの時代別も、貝塚によっては次の時期にまたがって形成されたものもあり、また現在不明のものも将来の調査によって、それぞれの時期に編入されると思われるから、多少時代別の数に変更があると考えられる。

本県における貝塚の分布は第1図のごとく、津軽平野西側の屏風山丘陵、ならびに十三湖周辺の一帯、下北半島北東部、小川原湖の周縁地区、現在の八戸市を中心とする一帯、の4地区に集中している。その理由としてこれらの地区は、地形的にみると、砂丘・河谷

第1図 東 北 北 部 の 貝 塚 分 布 図



河跡湖・潟湖などが多く、そのため貝塚形成期において、干満の差が大きく、貝の生育、ならびにその採集が容易であったことにも原因するのであろう。本県における貝塚分布上の特色として、干満の差の外海より多い陸奥湾沿岸にすくない点は、前述の貝塚形成期における、地形的な面を欠いたことに他ならない。

さきに表日本と裏日本の貝塚が、数の上で大きな差のあること、貝の種類に相違のあることを述べたが、本県の場合においても、全国とほぼ同様の結果となっている。数を示すと、日本海側に面するもの12、太平洋側38、陸奥湾4となり、太平洋側が圧倒的に多い。そして貝の種類も、日本海側では淡水性が多いのにくらべ、陸奥湾と太平洋側は鹹水性が主である。しかしこのような相違も、それぞれの貝塚が形成された初期における現象であり、時代が新しくなるにつれて、太平洋や陸奥湾でも、淡水性の貝が多くなるという事実がある。この事実こそ、海浸海退という海岸線の、うつりかわりに関係する問題解決の道なのである。

### 3. 海岸線の浸退について

貝塚からみた海岸線の移動に関する研究を、最初に手がけられたのは東木龍七氏である。氏は関東地方に所在する貝塚を地図上に記入し、石器時代の海浸最盛期における、海岸線を想定されたのであった。<sup>3)</sup>しかし、藤岡謙二郎氏が指摘されているごとく、海水の後退のみを仮定しての論であり、その生成がいずれも同一期のものと仮定し、鹹水産のもののみが<sup>4)</sup>取上げられていることなどから、現在では理論的に、われわれを納得せしめ得ないものがある。その後、考古学のめざましい進歩によって、縄文式土器の編年が確立され、戦後はとくに、関東地方では精密な細分化が進み、もはや変更の余地はみられぬほどになった。江坂輝弥氏は、このような進歩の上に立って、次のように推論されている。貝塚から出土する土器によれば、同一時期にすべてが形成されたのではなく、海岸線の移動、つまり海浸ならびに海退という、自然現象があつて、それにしたがひながら形成されたものであり、したがって海浸期の貝塚は古く、海退期のものは新しい様相を呈する、というのである。このような観点から、縄文式早期の前半にはすでに海浸現象をしめし、前期の中頃から末葉にかけて最大となり、やがて中期には海退期に入つて、海岸線は現在の<sup>5)</sup>状態に近づくといっている。

この2つの理論は、前者がまだ縄文式土器編年の確立されていない頃のものであり、いわば、長さを計る物差しを欠いていた時代の理論であつて、今日からみれば、飽きたらなさを感ぜさせるとしても、已むを得ないと思われるし、むしろ貝塚の分布からヒントを得て、縄文式時代における海水の、内陸部まで浸入した事実を突き止めた点で、高く評価

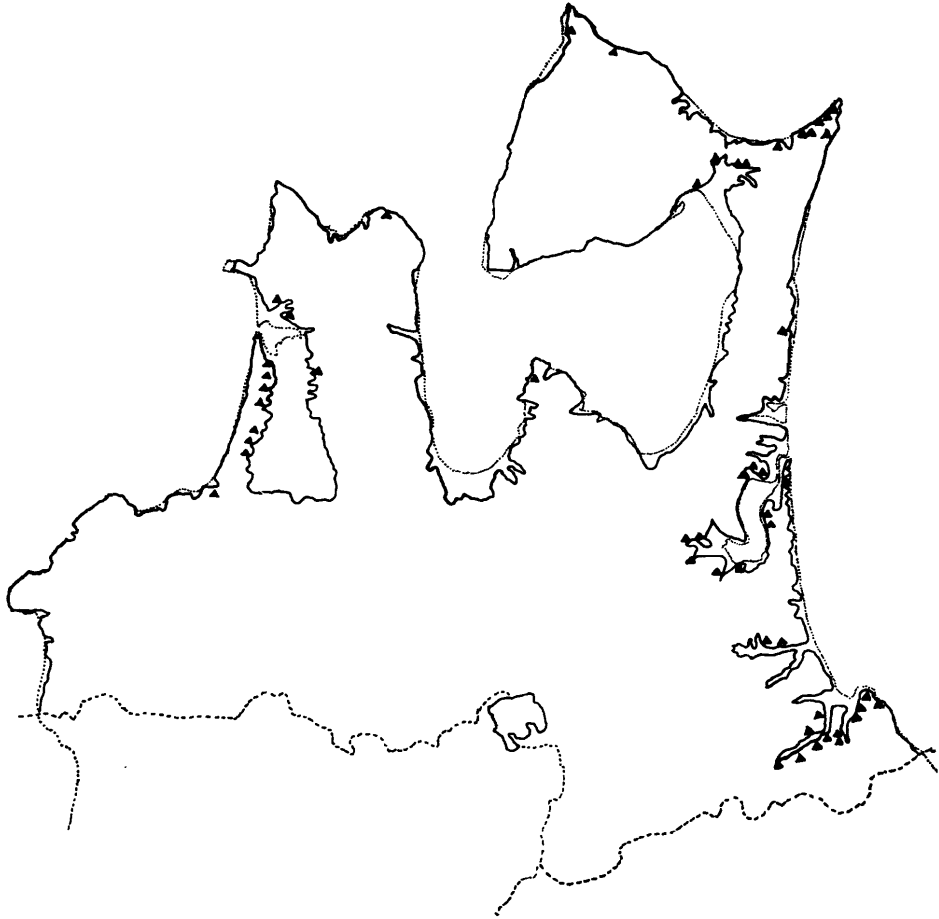
されねばならぬと考えられる。後者の理論は、東木理論に立脚して、戦後の考古学の進歩を加味された、いわば新しい観点に立つての理論であり、氏のたゆまぬ研究の成果がうかがわれるものである。

この先学諸氏の研究は、いずれも関東地方を中心に展開されたものであるが、われわれの現在居住している東北北部は、はたしてどのようなようであったか、以下それに関して論を進めたいと思う。

東北北部の、いままでに発見された貝塚のなかで、現在の海岸線よりもっとも奥まったところに所在するのは、上北郡天間林村のニツ森貝塚（第1図貝塚番号32以後は省略して番号のみ）である。この貝塚は、小川原湖にそそぐ七戸川の沖積平野に面した、開析台地上にあり、ホタテ・サルボウ・ハマグリ・シオフキ・アサリなど23種類の鹹水性の貝と、ヤマトシジミという淡水性の貝によって、つくられている。貝塚のこのされた時代を、土器によってみると、縄文式前期末から後期初頭にいたるもので、分層発掘の結果、前期末から中期中葉にかけての土器を出す層では、鹹水性の貝が出土し、中期中葉以後の層は、<sup>6)</sup>淡水性のヤマトシジミが主となっている。このような事実から、縄文式前期末には、海水がニツ森台地の近辺まで浸入していたと考えられる。この貝塚から、現海岸までの距離は直線で約16km、海水の浸入路と思われる高瀬川河口より約27.5kmあり、付近に点在する貝塚をふくめて類推すれば、小川原湖はかつての湾、あるいは大きな入江の一部であったと思われる。たとえば、立教大学で発掘した小川原湖東岸の野口貝塚は、縄文式早期末から前期初頭に位するものであるが、出土した貝は、アサリ・シオフキ・ハマグリなど、すべて鹹水性の貝によって占められているという。<sup>7)</sup>小川原湖北岸の中志貝塚（30縄文式前期）<sup>8)</sup>、東北岸の金糞平貝塚（36前期）も同様な純鹹水性の貝塚である。このように、湖岸周辺の貝塚から出土する貝によって、前述のごとく、小川原湖をふくめた周辺の河谷および沖積平野は、早期より中期中葉にいたるあいだ、海水の浸入をうけていたと思われ、中期中葉以降になって、ヤマトシジミのごとき淡水性の貝が主となるから、ほぼこの時代より徐々に淡水化していったと考えられる。そのもっとも海水が浸入した時期の海岸線を、5万分之1地形図を利用してあらわすと、10m間曲線とほぼ同じ位置を走り、現存の貝塚を地図上に記入すれば、すべてこの大きな入江の沿岸、すなわち10m線を越えた台地上に分布している（第2図参照）。

下北半島でも同様の見解が示される。たとえば、前期の円筒下層C式土器を出土する貝塚として有名な、女館（25）では、アサリ・サルボウ・シオフキなど、8種類におよぶ鹹水性の貝によってつくられている。<sup>10)</sup>ところが中期末の最花貝塚（24）では、シジミが90%以上をしめるといわれる。<sup>11)</sup>以上のような事実から、前期後半には、田名部川の沖積平野に

第2図 海浸最盛期の海岸線



海水の浸入がみられ、中期末にいたってそれが淡水化したという、いわば、さきの小川原湖周辺と、同様な変遷をなしたと思われる。

一方、現在の八戸市近辺においても、同じ様相を示している。たとえば、南郊に所在する早期の赤御堂貝塚（46）は、オオノガイ・オキシジミ・ハマグリ・アサリ・カキなど、<sup>12)</sup>23種類におよぶ鹹水性の貝塚であり、また市内の帽子屋敷（41）ならびに長七谷地（40）<sup>13)</sup>等の貝塚も同様である。これら早期の貝塚も、5万分之1地形図上では、10m間曲線上ないしは、それ以上の高さに位置するという、さきの小川原、下北地区と共通性をもっている。前期の貝塚も、熊ノ林（44）<sup>15)</sup>・一王寺（49）<sup>16)</sup>などによれば、早期とほぼ同様な高さとの貝の構成である。しかし中期以降では、たとえば長根貝塚（47）のごとく、ヤマトシジミ<sup>17)</sup>を主とする淡水の貝塚となり、海岸から約23kmある晩期の平貝塚（51）も、イシガイ・カ

ワニナ・カラスガイなど、淡水性の貝が主で、わずかながら鹹水性のものがあるとい<sup>18)</sup>た、早・前期とは、まったく異なった貝によりつくられている。このように、早・前期と中期以降とは、自然環境の面で大きな差異のあったことが推察されるのである。

津軽地方の貝塚は、そのすべてがヤマトシジミを主とし、それにカキ・アサリ・ハマグリといった鹹水性の貝が、わずかに認められる程度であって、太平洋側のように、明確な海浸現象をつかみ得ない。だが同地方の貝塚の分布からみれば、こんにちシジミ貝の産地として有名な十三湖が、貝塚の形成された時代には、現在の数倍に達する面積を有し、このため穀倉地帯としての津軽平野は、その大半が水の支配を受けていたものと考えられる。この地方における最奥の貝塚は、木造町館岡の大師山(8)・亀ヶ岡の田小屋野(10)であり、とくに田小屋野貝塚は、前期の円筒下層式と、中期の円筒上層B式土器が発見<sup>19)</sup>されている。この貝塚の標高は、5万分之1地形図によると、10~15mのあいだにみられ、したがってここでも10mの間曲線が、水と陸との境界線として一応の目安になろう。この10m線をたどってみると、南端は鶴田町周辺(十三湖水口より約33km)に達し、現在の五所川原市ならびに木造町は、水面下となる。この広大な湖の周辺に所在する貝塚で、もっとも古いものは、前期の円筒下層B式土器を出土する深郷田貝塚(3)があり、また前期終末期のものとして、オセドウ<sup>21)</sup>(2)、牛潟池<sup>22)</sup>(7)などがあげられる。のこる他の貝塚は、不明ないしは中期から後期にかけてのものである。このような時代ごとにわけ得る貝塚を基にして、津軽平野北半を被った湖水の、現在にいたる縮少化の変遷を論究すべきであるが、発掘された貝塚のすくない現段階で論ずるよりも、むしろ充分調査が行なわれてからの、宿題にいたしたいと思う。

以上、東北北部の貝塚から海浸最盛期と、さらに淡水に変わる時代について、考察を試みたが、海浸ははたしていつごろ開始されたか、引続いて考察を試みたいと思う。

江坂輝弥氏によると関東地方では、利根川・霞ヶ浦流域の千葉県香取郡小見川町城ノ台貝塚において、縄文式早期の田戸下層式土器を出土する層は、ヤマトシジミが見出されるが、田戸上層式土器よりさらに新しい型式になれば、鹹水性の貝類が出土するという、また城ノ台よりも約18km上流にあり、そして古い燃糸文土器を出土する西ノ城貝塚は、淡水性の貝によって占められているといわれる。さらに逆上って茨城県北相馬郡利根町の花輪台貝塚では、花輪台式土器とともに、ヤマトシジミ・ハマグリ・カキ・サルボウといった淡水性のほかに、鹹水性の貝が出土するという。このような事実にもとづいて、田戸下層式土器を使用した時代は、城ノ台付近でまだ淡水性の貝が棲息していたが、田戸上層式の頃になると、海水が浸入したものと思われ、さらに花輪台式土器の時代には、海水が利根川の谷を逆上り、取手町より約8km下流付近まで到達していたとい<sup>23)</sup>う。

東北北部では、たとえば小川原湖周辺において、縄文式早期後半の早稲田1～5類土器<sup>24)</sup>を出土する早稲田貝塚(37)が、ハマグリ・シオフキ・カキ・アサリなどの鹹水性貝塚であり、すぐ南隣に所在し、前期初頭の早稲田6類土器を出土する野口貝塚(38)も、鹹水性の貝塚である<sup>25)</sup>。また湖の北岸にある唐貝地貝塚(29)は、早稲田5類土器を出土するが、この貝塚もハマグリ・アサリ・シオフキ・オオノガイといった、鹹水性の貝によってつく<sup>26)</sup>られている。このような貝塚の所在と時代から、当地方の海浸をみると、早稲田1類土器がつくられた頃には、海水がすでに小川原湖に入っていたと考えられるが、なお多くの発掘資料を得なければ、明確な海浸の事実は、関東地方のごとくつかみ得ない。一方、八戸地区において、早期にふくまれる明白なものは赤御堂貝塚(46)のみであり、帽子屋敷(41)や長七谷地(40)などの貝塚は、縄文が施文された尖底土器、とだけしかわからず、当地区の海浸については、明確な編年の位置が定まるまで保留したいと思う。それまでの仮説として、赤御堂式土器が使用されていた時代は、すでに海浸期に入っており、新井田川にそって約5km、現海岸から直線で約4.5km付近に、海水の浸入があったと思われ、一方、五戸川の河谷でも早期後半には、すくなくとも河口から約2～3km奥へ浸入していたと考えられる。

縄文式前期の海浸最盛期にいたると、小川原湖の入江では約27.5km、八戸地区は新井田河谷で約7.5km、下北半島では田名部川にそって約4km奥へ浸入していたものと思われ、さらに今後の調査によっては、前述した10m間曲線上、ないしはその周辺において、この時代における貝塚の発見も考慮される。

中期末以降は海退期に入り、おのおのの河谷に面する平野は前進し、また小川原湖は淡水化への道を歩みはじめたものと考察される。

#### 4. 海浸海退の原因

さきの、海岸線の浸退について述べた海浸海退の現象は、はたして何を原因として起ったのであろうか。江坂氏によればその最大の原因として、海浸は陸地の沈降運動によって起り、縄文式前期末以後は、地殻の輪回運動が隆起運動に転換したので、海岸線は現在の<sup>27)</sup>方向に後退し、いわゆる海退現象を現出したのであろうといている。一応もっともな意見と思われるが、しかしなお満足するには不十分である。たとえば、利根・霞ヶ浦流域という、局地的に起った現象であれば理解も出来るが、全国的な規模で起った現象であり、関東地方においても、那珂川流域・東京湾・相模湾の沿岸などでもみられ、また東北地方は、仙台湾沿岸でも類似の現象があり、江坂氏のいう地殻運動のみによって起ったとは考えられないし、むしろ他に原因があつての結果であろうと思われる。

近年、地学研究者から、洪積世の時代、つまり氷河期に、氷床が増えて地球の広大な面



積を被い、逆に間氷期は、それらの氷が融けて水の量が増えるという理論が、相次いで発表されている。それによると、第3氷期（Riss）の頃は現在より気温が8～9度低く、したがって海水面も100m±ほど下り、第3間氷期の Riss—würm では、逆に気温が2度ほど高くなって、海水面もそれにともない6～30m上昇したというのである。最後の氷期といわれる würm 氷期では、温寒が7回にわたってくり返され、würm 1 には100m±近くも海水面が低下し、また würm 2—würm 3 間氷期は、逆に12m±の上昇をみるという、海面変動があったといわれる。後氷期（沖積世）に入っても、これに似た現象は続き、今から4,500～7,500年前は Atlantic 期で、気温は2度ほど高く、海水面もそれにともない、<sup>28)</sup>10～15m±上昇したという。わが国の縄文式前期は、iRadio Carbon Dating によると、加茂遺跡（千葉県安房郡丸山町所在：前期中葉黒浜式）の資料では、BC3145±400と算出さ<sup>29)</sup>れ、今から5109±400年前になるといわれる。もしこの数字が正しいとすれば、前述の Atlantic 海浸がわが国の有楽町海浸期に相当しており、海水が河谷を逆上って低地を浸したのだとしても不思議はない。以上の原因によって、東北北部の潟湖、ならびに各河川の河谷も、縄文式時代の海浸最盛期には、しばしば述べたように、5万分之1地形図の10m間曲線周辺まで、海水が浸入していたことも理解されるのである。

## 5. 結 論

わが国に所在する2263ヶ所の貝塚は、約85%が鹹水性の貝塚であり、しかもその多くは表日本に分布している。この貝塚の編年の位置を考慮に入れて、所在を5万分之1地形図に記入すれば、想像以上の奥地まで分布することがわかる。このような事実から、縄文式時代に海水が沖積低地へ浸入し、しかも地形図上の、10m間曲線周辺まで達していたことが看取され、その時代は縄文式時代前期であり、それ以前は海水が進み、以後は退くといった現象を把握することが出来る。このような現象の起った原因は、地盤の隆起、ないしは沈降による結果とみるよりも、むしろ世界的に起った後氷期の海面変動、つまり Eustasy によるもの、と結論づけられる。

最後に、本稿を草するにあたって助言いただいた、弘前大学教育学部地理学研究室の水野裕講師、挿図の作製に協力ねがった川崎凱久君に、厚くお礼申上げる。

- 註1) 酒詰仲男, 日本貝塚地名表, 1959年。
- 註2) 青森県教育委員会, 青森県遺跡地名表, 1962~64年。
- 註3) 東木竜七, 貝塚分布の地形学的考察, 人類学雑誌, 46の12, 1926年。
- 註4) 藤岡謙二郎, 地理と古代文化, 1946年。
- 註5) 江坂輝弥, 海岸線の進退から見た日本の新石器時代, 科学朝日14の3, 1954年。
- 註6) 小片・村越, 青森県二ツ森貝塚発掘調査概報, 青森県教育委員会, 1962年。
- 註7) 岡本勇他, 青森県三沢市野口貝塚発掘調査抄報, 1962年。
- 註8) 二本柳・渡辺, 六ヶ所村周辺の円筒土器, 東奥文化13号, 1959年。
- 註9) 註8に前掲。
- 註10) 江坂輝弥, 青森県女館貝塚発掘調査報告, 石器時代2号, 1955年。
- 註11) 江坂輝弥, 青森県下北半島最花貝塚の調査日誌より, 石器時代5号, 1958年。
- 註12) 江坂輝弥, 青森県三戸郡大館村十日市字赤御堂貝塚の調査, 日本考古学協会第18回研究発表要旨, 1956年。
- 註13) 栗村知弘, 八戸市類家帽子屋敷貝塚発掘調査報告, 奥南史苑, 6号, 1962年。  
 “ 江坂輝弥, 青森県八戸市帽子屋敷貝塚, 日本考古学年報, 11, 1962年。
- 註14) 江坂輝弥, 青森県八戸市長七谷地貝塚, 日本考古学年報, 11, 1962年。
- 註15) 八戸市立商業高校社会科研究会, 八戸市種差熊ノ林貝塚発掘について, 奥南史苑, 6号, 1962年。
- 註16) 宮坂光次, 青森県是川村一王寺史前時代遺跡発掘調査報告, 史前学雑誌, 2の6, 1930年。
- 註17) 江坂・笹津・西村, 青森県三戸郡大館村蟹沢遺跡調査報告, 石器時代, 5号, 1958年。
- 註18) 江坂輝弥, 青森県三戸郡平貝塚, 日本考古学年報, 11, 1962年。
- 註19) 佐藤公知, 亀ヶ岡文化, 1956年。  
 “ 山内清男, 関東北に於ける繊維土器, 史前学雑誌, 1の2, 1929年。  
 “ 亀ヶ岡考古館収蔵遺物による。
- 註20) 渡辺兼庸氏の御教示による。
- 註21) 山内清男, 関東北に於ける繊維土器, 史前学雑誌, 1の2, 1929年。  
 “ 吉田・直良, 青森県相内村オセドウ貝塚, 古代文化, 13の2, 1942年。
- 註22) 表面採集による。
- 註23) 註5に前掲。
- 註24) 二本柳・角鹿・佐藤, 青森県上北郡早稲田貝塚, 考古学雑誌, 43の2, 1957年。  
 “ 角鹿・二本柳・佐藤・渡辺, 早稲田貝塚, 上北考古会報告1, 1960年。
- 註25) 註7に前掲。
- 註26) 二本柳・角鹿・佐藤, 青森県上北郡早稲田貝塚, 考古学雑誌, 43の2, 1957年。  
 “ 二本柳・佐藤, 六ヶ所村出土早稲田第5類土器, 上北考古会報告2, 1961年。
- 註27) 註5に前掲。
- 註28) 小林国夫, 第四紀(上), 1962年。  
 “ 湊・井尻, 日本列島, 岩波新書, 1958年。
- 註29) 考古学手帖, 7, 1959年。

付表として、理解の補助のために、縄文式土器の編年表を添付する。

地域 時代	青 森 県	関 東 地 方	Radiocarbon dating による絶 対年代
縄 文 式 晩 期	砂 剣 葛 新 城 岡 平 是 雨	大洞A' 2 " 1 大洞A " C2 " C1 " B C " B	弥 生 式 時 代 千 桂 安 行 網 台 " " III C " " B " " A
" 後 期	⊕ ⊕ 大 札 ⊕ ⊕	湯 地 曾 加 堀 称 曾 利 之 名	II I 谷 B 内 寺 1122 B. C. ± 180 2563 B. C. ± 300
" 中 期	最 花・榎 林 円筒土器上層 D " C " B " A	加 曾 利 E 阿 玉 台・勝 坂 五 領 ケ 台	
" 前 期	円筒土器下層 D " C " B " A ム シ リ B III 早稲田 6 類	十 三 菩 提 諸 磯 { C 黒 関 花 積 下 B A 浜 山 層	3145 B. C. ± 400
" 早 期	" B II 家 類 赤 ム 日 計・吹 切 沢 小 船 渡 平・下 松 苗 場 浜 ?	" 5 " " 4 " " 3 " " 1 " ? 茅 山 上 下 " ケ 島 鶺 野 子 田 母 上 下 " 戸 上 下 三 花 輪 台 2・平 " 1・大 浦 稻 夏 大 井 荷 ?	7491 B. C. ± 400

(江坂輝弥氏作製の編年表を参考にした)